

ブリーフィング・メモ

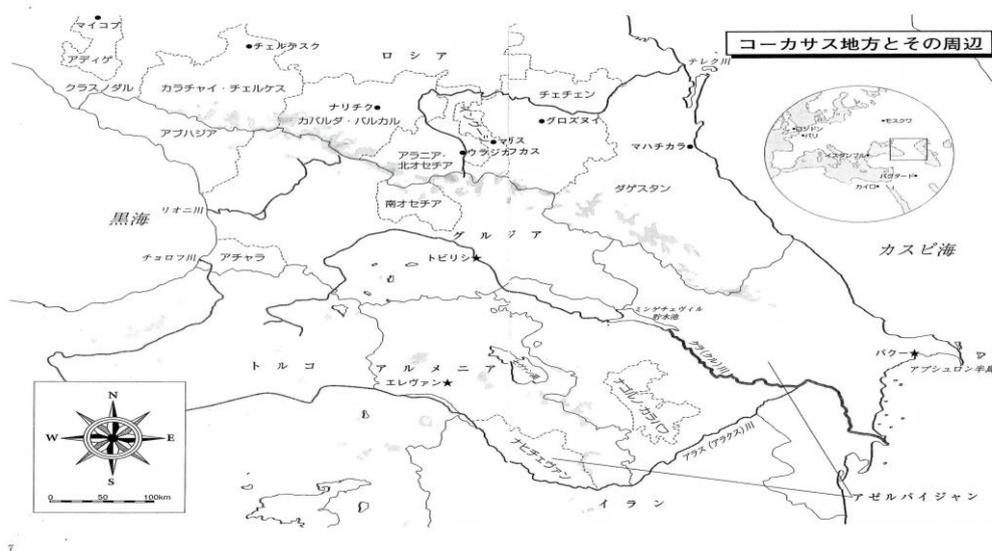
ロシア帝国とカフカスの軍事史的起源—祖国戦争後の貴族将校たち—

戦史研究センター戦史研究室教官 花田智之

はじめに

本稿は、現代ロシア連邦とカフカス（コーカサス）の地域安全保障をめぐる軍事史的起源を明らかにするため、19世紀前半の祖国戦争（ナポレオン戦争）後のロシア帝国史に焦点を当てる。この時代は、ウィーン体制下でヨーロッパ国際秩序の一端を担うことになったロシア帝国が東方の新たな大国として強大化をし続けた軍事史に彩られており、勢力版図は西部ではフィンランド大公国、バルト海沿岸地域、ポーランド会議王国を支配してヨーロッパ諸国と隣接し、東部ではシベリアや中央アジアへ向けて入植を続け、そして南部ではノヴォロシアやカフカスを支配してペルシアやオスマン帝国と対峙するという、まさに多方面にわたって展開された。これは同時にロシア帝国が支配領内に新たな政治的・経済的・社会的・文化的特徴を現在進行形で包摂していく帝国建設の過程でもあった。

特に1801年9月のグルジア王国併合以降、ザカフカス（南カフカス）の領内支配は数多くの政治的混乱を経験し、そして北カフカスの戦争ではロシア帝国軍が有効な軍事戦略を講じられずにいた。これほどの帝国秩序の不安定さは他に見られなかった。



こうした見地から、本稿はロシア帝国が支配領域を拡大する過程で本国または国境・辺境領域で活躍した、帝国陸軍の中堅・若手の貴族将校たちに注目する。中でも多言語・多宗教・多民族という特徴を有したカフカスにおいて、祖国戦争の戦果により若くして陸軍将官となったイワン・パスケヴィッチやミハイル・ヴォロンツォフは、カフカス総督（長官を含む）に補されてザカフカスの領内支配を実行した。また、北カフカスのイスラム指導者であるイマーム・シャミーリおよびミュリディズム（スーフィズムの一派）との戦争においては、帝国陸軍を指揮して辺境防衛の任務を果たした。彼らはまさに内政と軍事を

兼務する形で支配権力を行使し、帝国の秩序形成を国境・辺境領域で実践した。一方、本国に目を向けると、アレクサンドル・チェルヌイショフは陸軍大臣として帝国全体を統率して、本国からカフカス支配に直接的影響を及ぼした。彼らの存在なくしてロシア帝国とカフカスの軍事史を語ることはできない。本稿の主眼はこれら3人の貴族将校である。

カフカス長官としてのパスケヴィッチ

パスケヴィッチは1782年にポルタヴァで生まれ、1809年に大佐、10年に少将、13年に中將、26年に大將、29年に元帥へと昇進した。祖国戦争時は第26歩兵師団長として活躍し、戦後は親衛第2歩兵師団長(ミハイル・パヴロヴィッチ大公の護衛)や親衛第1歩兵軍団長などを務めた。

そしてカフカスとの関係において、彼は現地司令官としてペルシア、オスマン帝国、アルメニアとの戦争を指揮し、エレヴァン(ロシア語読みは「エリヴァン」)進攻で勝利を収め、1828年のトルコマンチャーイ条約によりエレヴァン・ハン国とナヒチェバン・ハン国を併合した。これによりペルシアはカフカスから撤退し、彼はこの戦果を讃えられ「エリヴァン公」を名乗ることとなった。彼はまた、カフカス長官の前任者のアレクセイ・エルモロフを「啓蒙的」だと非難し、本国の意向と利益を重んじた支配体制を望んだ。そして本国では、元老院と法務省が中心となりザカフカス特別委員会が設立され、ザカフカスの内政に関しては同委員会が長官に上位して支配するように制度変革がなされた。

パスケヴィッチは、1830年にポーランド会議王国での「11月蜂起」の報を受けて、反乱鎮圧のためワルシャワへ出立し、そのままポーランド王国総督に就任した。そして戒厳令を敷いてポーランド憲法を廃止し、セイム(議会)を禁止することで、王国内の治安維持に務めた。彼はまさにロシア帝国の国境・辺境領域であるカフカスとポーランドで帝国秩序の安定化と安全保障に大きく寄与した貴族将校として位置づけられる。

陸軍大臣としてのチェルヌイショフ

チェルヌイショフは1786年にモスクワで生まれ、1810年に大佐、12年に少将、14年に中將、27年に大將へと昇進した。祖国戦争前は駐仏大使館付陸軍武官等で外国勤務を経験し、戦時は独立騎兵支隊長として活躍し、戦後は騎兵師団長やドン・コサック軍団の設立委員会議長を務めた。1828年から32年までは参謀総長、32年から52年までは陸軍大臣に補された。

そしてカフカスとの関係において、彼は本国主導の委員会による直轄支配に陸軍大臣として深く関与し、またそれに伴う政治的・軍事的混乱の收拾に追われた。特に北カフカスのチェチェンやダゲスタンでは山岳諸民族との戦争が断続的に繰り返され、1840年にはシャミーリを宗教・政治指導者とするイママート(イスラム神権政治国家)を目指した戦線が反ロシア帝国支配を旗印に新たな広がりを見せた。また、アヴァール人の英雄的指揮官であったハジ・ムラートがシャミーリに味方したことでダゲスタンにも戦線が拡大し、ロシア帝国は北カフカスで帝国最大の脅威に晒されることとなった。

こうした中で、チェルヌイショフは同委員会議長に就任して、新たなカフカス支配体制の将来構想を起案した。これはザカフカスの内政的混乱の解消だけでなく、カフカス戦争の戦況打開も目指していた。そして彼はカフカスの現状に関する調査報告書を作成し、長官体制でも本国委員会の直轄支配でもなく、現地に強力なリーダーシップを有した総督府を創設し、総督に内政と軍事の強大な権限を与えることでカフカス支配の秩序形成を果たすべきであると結論づけ、ニコライ一世に上奏した。これはまさにロシア帝国がザカフカスとの軍事史から導き出した歴史的帰結であり、チェルヌイショフは帝国の中枢からカフカス支配に多大な影響を与えた。

カフカス総督としてのヴォロンツォフ

ヴォロンツォフは1782年にサンクトペテルブルクで生まれ、幼少期・青年期を駐英大使だった父セミョーノフとともにロンドンで過ごし、1807年に大佐、10年に少将、13年に中將、25年に大將、56年に元帥へと昇進した。祖国戦争時はピョートル・バグラチオン司令官の指揮下の混成擲弾兵師団長としてヴォロジノ会戦やクラオンヌの戦いで活躍した。そして戦後はノヴォロシア＝ベッサラビア総督として、南ロシアの政治経済圏の確立と「東方問題」を含めた黒海沿岸での権益拡大を推進するため、セバストポリなどの港湾インフラの整備に力を注いだ。また黒海を中心とした自由貿易を実現させるため、クリミアを中心としたワイン産業発展を奨励し、オデッサとヤルタを中継貿易都市とした蒸気船事業の振興に貢献したことで知られている。

彼とカフカスの関係は深く、彼はまず創設されたカフカス総督とカフカス独立軍総司令官を兼務することで内政と軍事の絶対的な権限を有した。そしてチェルヌイショフおよび本国委員会との往復書簡を通じた情報伝達・意見交換により、カフカス総督府の官房組織の充実化を計った。

そしてカフカス戦争では、彼は総司令官として大会戦での北カフカス制圧は不可能であると判断し、かつてエルモロフが実施したような、シャミーリを山岳包囲作戦で追い詰めながら小規模な会戦を繰り返すという戦争指導により北カフカスを制圧する「新戦略」が必要であると力説した。そして彼は従来の軍事戦略を改め、シャミーリとミュリディズムを山岳奥地に封じ込めることで勝機を見出した。具体的には、第一に、チェチェンの山林を大規模伐採して更地を拡張し、ロシア陸軍の機動力を高めて砲兵部隊による攻撃を効果的に活用した。これは同時に山岳民の生活圏を奪うことで彼らの反撃を防ぐという効果も得られた。第二に、山林伐採した更地に新しい要塞を建設することでシャミーリ包囲網を固めた。ハサブユルト要塞、アチホイ要塞、ウルスマルタン要塞などが新設され、また同時にグロズヌイ要塞の改修やグルジア軍用道路・幹線道路の整備も進められた。

そして山岳包囲戦という布陣の下、カフカス独立軍の左軍による小規模な会戦が断続的に続けられた。特に「新戦略」は北カフカスの気候を反映して軍事進攻の時期を決定し、チェチェンなどの山地で森林の多い地域には落葉する秋と冬に行軍し、北ダゲスタンには夏に行軍するのが望ましいとされた。こうしたカフカスの風土を十分に考慮した軍事戦略

により、カフカス独立軍は1847年9月サルト要塞、48年7月ゲルゲブリ要塞をそれぞれ攻略することに成功し、シャミーリを山岳奥地へと徐々に追いやったのである。

ヴォロンツォフが在任した約10年間で、ザカフカスの内政は新たな行政・経済・社会政策を実施することで安定した支配体制を構築することに成功し、またカフカス戦争においてはロシア帝国の勝利を決定づける軍事戦略が講じられたことで(シャミーリの降伏は1859年8月グニブ要塞)、彼はまさにカフカス総督として帝国の国境・辺境領域の実質的支配者としての政治的機能と軍事的役割を果たした。

おわりに

上記した3人の貴族将校がもたらす現代的意義について、私はロシア帝国とカフカスの政治史的・軍事史的背景を把握することで、カフカスという地域の一体性を重視する必要性を理解することだと考えている。現代のカフカスの地政学的な重要性を考慮すると、当該地域には軍事バランスや天然資源の豊富さなどの安全保障の観点から、多くの関心が集められており、国際政治的に不安定な情勢が続いている。北カフカスのチェチェン共和国では2009年に対テロ作戦体制が解除されたものの、治安は依然として緊迫しており、また非承認国家をめぐるナゴルノ＝カラバフ紛争や、ロシア連邦とグルジアとの間で生じた南オセチア紛争など、いずれも国際社会に問題の複雑さを露呈している。本稿を通じて多言語・多宗教・多民族というカフカスの地域全体の特徴が認識され、そしてロシア軍事史がもたらす教訓的視座が提供されることで、将来的な地域安全保障を考察する一助となれば幸いである。

(平成24年4月10日脱稿)

【参考文献】

- ・地図は、北川誠一ほか編『コーカサスを知るための60章』(明石書店、2006年)6-7頁。
- ・*Волков, С.В.* Генералитет Российской Империи: энциклопедический словарь генералов и адмиралов от Петра I до Николая II. Центрполиграф, Москва, 2010.

本欄は、安全保障問題に関する読者の関心に応えると同時に、防衛研究所に対する理解を深めていただくために設けたものです。複雑な安全保障問題を見ていただく上で、本欄が参考となれば幸いです。なお、本欄における見解は防衛研究所を代表するものではありません。

ブリーフィング・メモに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。ただし記事の無断引用はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

専用線：8-67-6522、6588

外線：03-3713-5912

FAX：03-3713-6149

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.go.jp>